

古代のムラのはじまり

いんないだい いせきぐん
～船橋市印内台遺跡群を中心に～

印内台遺跡群は東京湾北岸部に位置し、JR西船橋駅から北へ向かった台地上にあります。東西約700m、南北約1,300m、面積は約687,500㎡という広大な遺跡です。一帯は『和名類聚抄』に記される下総国葛飾郡栗原郷の一部に比定されています。また古代の国府があった市川市下総国府跡から東へ約6.5kmと近い距離にあります。

遺跡の南側には東京湾沿いに古代東海道が通っていたと推定され、遺跡は水陸交通の要衝に立地しています。これまでの約40年間に62地点が調査され、古代から中世にいたる大集落遺跡であることがわかりました。中でも飛鳥時代から奈良・平安時代（7世紀～9世紀代）の律令制期にムラは栄え、竪穴住居跡約540軒、掘立柱建物跡、鉄製品工房跡、土坑、道路跡、溝などが発見されました。

ムラのはじまりは7世紀前葉～中葉頃であり、遺跡の南部に集中して竪穴住居が作られ始め、8世紀以降は台地全体に拡大していきます。この頃には、中央政府の古い祭祀に準じた卜甲（亀）・卜骨、「丈部」などの氏名を刻んだ砥石などの祭祀遺物や、円面硯、漆紙文書、畿内産の土師器、和同開珎などの官衙（役所）や中央政府との関係を示す遺物も出土しました。また複数の馬の骨も発見されていることから、ムラの中には牧があったと推測されます。

当時、都では中央集権国家を作るために、唐の律令制にならって法体系を整え、地方を整備しはじめた時期であり、日本の一大変革期にあたります。印内台の初期のムラは、このような国家的な動きのもとに、それまでは人が住んでいなかった台地上に計画的に作られたと考えられます。その中で遺跡の南部は祭政の中心地になったとみられます。

周辺のおもな古代遺跡を見てみると、印内台遺跡群の西側には東中山台遺跡群、東側には海神台西遺跡、夏見台遺跡群（夏見台遺跡、夏見大塚遺跡）があります。各遺跡は船橋市内の主要河川である海老川よりも西に位置し、東京湾沿いに並ぶ比較的広い台地上に展開する大集落遺跡です。また海老川東岸の小高い砂丘上には船橋大神宮（式内社意富比神社）があり、この一帯は古代の要地でした。

各遺跡は古代の栗原郷におおむね含まれると考えられます。但し古代末期になると、船橋大神宮を中心として夏見御厨（伊勢神宮の荘園）が成立します。この頃、夏見台遺跡群は御厨の範囲に含まれたと推測されます。

各遺跡において集落（ムラ）が作られる時期は、夏見台遺跡群は6世紀から、印内台遺跡群は7世紀から、東中山台遺跡群は7世紀後半から8世紀にかけてであり、少しずつ時期の差があることが、これまでの調査でわかってきました。この中では夏見台遺跡群がやや古い様相を示しています。また夏見台遺跡群の周辺では、さらに古い4世紀、5世紀代の集落および滑石製模造品工房跡が発見されました（辺田台遺跡、台畑遺跡、宮本台遺跡群）。つまり海老川を中心とした東岸・西岸の地域において、古代以前となる古墳時代の古いムラのはじまりも認められます。

各遺跡で発見されたムラはそれぞれ栄枯盛衰がありますが、印内台・東中山台・夏見台遺跡群などの大集落遺跡は古代から中世へとつづき、さらに近世、近代を経て現代の船橋の都市へとつながっていきます。



船橋市印内台遺跡群 時期別竪穴住居跡分布と7・8世紀の主要遺物